

木田市長の



ど〜んと

真珠のように輝く  
まちづくりのために

コミュニケーション

vol.59

となりは何をする人ぞ

2年程前、急に世の中の景気が悪くなつて、企業が多くの従業員を解雇しました。その時、路上生活者が大きく増えて問題となり、年末には食糧を配る「たき出し」が行なわれたり、救済村ができたりしました。

当時、わたしは不思議だなあと思つていました。仕事がなくなくなり、住むところがなくなつたら、わたしたちなら、実家へ帰る、親戚を頼る、友人・知人にひとまず助けってもらうというようなことを思いつくはずです。

「困ったときはお互いさま」という言葉もあります。仕事がなくなくなった、イコール路上生活というのは、ちよつと極端な話だとも思いました。

さて今度は、母親による幼いこどもの置き去り問題です。

こどもの苦しみを考えることのできない母親には言葉もありません。面倒を見るのが嫌だとしても、元夫や両親、あるいは行政に対してでも、子どもをゆだねるといふ選択もあつたはずです。昔はどうしても自分で育てられないときは捨て子をして、見ず知らずの人にこどもを育ててもらえるかもしれないという可能性に期待をかけたものです。

次は行方不明の老人の問題が発生しました。自分の父親や母親がどこに居るのか、生きていのか、亡くなつていのか、さっぱりわからないというのですから開いた口がふさがりません。

母親が亡くなるという出来事などは、誰にとつても人生最大級の悲劇の一つだと思えます。「何年も会つていませ

ん」で済む問題でしょうか。百歳以上の老人だけでも全国で数百人の行方不明ということですが、80歳、70歳と年齢を下げて調べたら、いったい何人の不明者が出てくるやら、そら恐ろしい状況です。ましてや、その不明者の年金を受け取つていたとしたら言語道断です。年金は本人が生きていくために支給されているのですから、自分が使つてしまつたら、本人の生活はどうなるのでしょうか。

国民の生死は、本来は明確になつていなければいけないと思いません。しかし、それを確かめる作業は行政にとつてもなかなか困難な問題であることも事実です。

「日本の国も変わつてしまつた」「日本の国も何かが壊れてしまつた」そんな風に感じるのはわたしだけではないでしょう。

今は、同窓会の名簿さえ出しにくい時代となりました。個人情報保護も大事でしょうが、社会の絆はもっと重要だと思えます。

隣は何をする人かくらひは知つておくべきではないでしょうか。

人権文化の  
花を咲かせよう

Vol.98

お酢に歌を

先日テレビを見ているとお酢を作る工程の中で、職人のかたが話しかけるように歌を歌いながら、かき混ぜる作業を行つていました。

お酢に歌を？と最初は不思議な気分になりましたが、そのかたが「熟成させるためにはしばらく時間をかけて、眠らせるのですが、こうして歌を歌つてあげると、風味のあるおいしいお酢ができるのです。何に対しても話しかけてあげることが大切なのです」とおっしゃつた言葉が印象に残りました。

確かにこどもを寝かしつける時、耳元で優しく語りかけるように子守唄を歌っていると、あつという間に安心した顔をして眠つてしまします。しかし、ライフスタイルの多様化により、ゆつくりと話をする時間がとれなくなつてきている人もいます。

また、様々な電子媒体が普及することで、顔をつき合せて会話をする機会も減つてきています。それらは、情報を迅速に伝えるためには、便利なツールではありますが、残念ながら時には人間関係を希薄化させてしまう原因にもなつています。

誰かが傍にいてくれる、そして自分に優しく語りかけてくれている、そういった安心感は、たとえ対象物が何であつても、命をはぐくんでいくことに必要なことではないでしょうか。

